

鈴虫とサブスクと「愛するヨーコ」

ついこないだまで虫の鳴き声が心地良い秋だった。この季節の愛聴盤の一つがXTCの「スカイラーキング」（1986年発売）。虫と鳥の鳴き声にシタールが重なり、一曲目が始まるというアイデアは、ビートルズの「アビーロード」（1969年発売）の影響に違いない。

ところで、サブスクの登場により、音楽をアルバム単位で聴くという文化は崩壊するとされている。サブスクで音楽が聴かれる限り、レコードやCDのように十数曲のまとまりで音楽作品を作る意味はなくなる。ある曲から次の曲へのつながりという概念もなくなってしまふ。つまり「アビーロード」や「スカイラーキング」のような名盤は二度とは生まれられないということになる。ただし、アルバム単位でロックが聴かれるようになったのは1960年代のビートルズ以降。それまではシングルレコード（曲）があくまで主流。エルヴィス・プレスリーでさえヒットアルバムを持たないわけだから、元に戻っただけといえなくもない。（考えてみると、これまでも歌謡曲や演歌にはアルバム単位でのヒットというものはほとんどない。アルバムというフォーマットが消えてしまうということは、何も特別なことではないのかも知れませんが、個人的には寂しい限りですが）

それにしても驚くべきことは、所有するCD全てを持ち運べる「iPod」がかつては音楽業界の黒船と言われていたのに、2001年の発売からわずか20年で生産終了したことではないだろうか。CDから曲を取り込んだり、一曲単位で購入したりしなくて済むサブスクに取って代わられたわけで、これから先も音楽業界の変化や進歩は止まることがないに違いない。

しかし、便利なことはいつも正しいのか、変化や進歩を必ず追いかけないといけないのか、という疑念をぬぐえないのは私だけだろうか。数万曲を自由に聴けるという状況は、本当に好きな音楽を聴いている状況なのだろうか。欲しいレコードの中からどの一枚を買うべきか。そうした悩みに明け暮れていた頃が一番楽しく音楽を聴いていた。そう感じている同世代の人は少なくないだろう。聴きたいものを全部は聴けないというもどかしさが、色あせない音楽への深い愛情につながったとは言えないだろうか。

さて、ビートルズのジョン・レノンが出した1969年発売のライブアルバム。（正確には「プラスチック・オノ・バンド」名義）。自分のライブをA面に愛するヨーコのライブをB面にしたら、誰もB面を聴きたがらなかったというのは有名な話。（勇気がたっぷりある人なら一度は聴いてみてもいいかも。もちろん、私は絶対に勧めませんが）そこでの苦い経験から、ジョン・レノンは1980年発売の「ダブルファンタジー」では自分とオノ・ヨーコの曲を一曲ごと交互に並べるといふ暴挙に出た。さすがにレコード針をいちいち上げて一曲目の次は三曲目に針を落としてなんて、面倒くさいことは誰もしたくない。ビートルズファンの多くが閉口したのは言うまでもない。それから数年後、CDが普及した頃、これでヨーコの曲を簡単に飛ばして聴けるぞとCDの便利さを享受したのは若気の至りか。それを思えば、自分のことを棚に上げて、「若いやつはすぐに新しいものに飛びついて、古いものの良さを顧みない」なんてサブスク批判・便利さ批判を簡単にはできませんよね、という反省の弁で今回は筆を置きます。

令和4年10月30日

大村城南高等学校長 中小路尚也